

支援センター名	岡山市子どもチャレンジサポートセンター (ももコンセンター)
所在地	〒700-8544 岡山県岡山市大供一丁目1番1号 (岡山市教育委員会生涯学習課内)
連絡先	Tel 086-803-1606 Fax 086-234-4141 ホームページ http://www.city.okayama.okayama.jp/kyouiku/syougaiakusyuu/momopoke/momotop.htm

事業の概要とポイント

岡山市では、岡山市立の学校園での教育活動に地域の教育力を活かすため、平成14年度から学校支援ボランティア制度をスタートさせ、あらかじめ登録した地域住民や保護者などに、授業援助・環境整備・安全確保など幅広い分野で、学校教育を支援していただいている。

平成15年度は、行動力のある若いボランティアの導入と、学校生活時間帯で活動可能な人材の確保という期待に応えるために、現役大学生に大学単位で登録していただき、学校現場では大きな成果を上げている。

大学生にとっては、学校園での子どもたちとのふれあい体験を、今後の社会生活に活かすことができるほか、特に教職を目指す学生にとっては、大学での講義とは異なる現場活動を経験する場となる。

関係した学校・団体等の名称

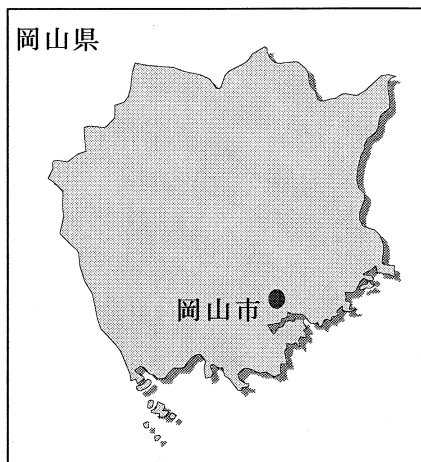
岡山大学、ノートルダム清心女子大学、山陽学園大学、山陽学園短期大学

地域の現況・特色

本市は、吉備文化ゆかりの地として古い歴史と伝統があり、温暖な気候や豊かな自然に恵まれた、人口63万7千人の「国際・福祉都市」である。

また、中四国の交通の結節として成長を遂げ、中核市に移行した平成8年4月以降も、西日本の中核拠点都市として発展を続けている。

こうした中、平成13年11月、岡山市教育委員会は「岡山『人づくり』プラン」を策定し、「子どもたちが愛されていると実感できる家庭・学校・地域社会」



の実現をめざして、市民の連携と協働による取り組みを進めている。

生涯学習課では、地域の教育力を学校の教育活動に活かすとともに、市民の生涯学習活動の成果発表の場を提供するため、「開かれた学校づくり」を進めており、①学校週5日制の下での子ども向け事業、②「学校支援ボランティア制度」の運用、③学校施設の地域への開放などを行っている。

企画から活動までの経緯

- 平成15年2月 岡山大学・ノートルダム清心女子大学・山陽学園大学・山陽学園短期大学が、岡山市「学校支援ボランティア」制度への参加を申し出。
- 3月 各大学担当者との打ち合わせを重ね、オリエンテーションの日程や作成資料について協議。
- 4月～ 大学生にオリエンテーションへの参加を促す資料を配布。
- 4月中旬 大学ごとにオリエンテーションを実施し、本制度への登録希望者を募集。
- ～5月 登録希望者を対象とする研修会を実施し、「登録証」を交付。
- 6月 大学生による、学校支援ボランティア活動を開始。
(幼稚園のふれあいフェスティバルの保育支援、園外保育の支援、中学校保健室でのカウンセリング支援、山や海の学校等での指導補助)
- 7月 大学の夏休み期間にあわせて、ボランティア活動依頼が急増。
(園外保育支援、学校図書館のデータベース化作業の補助、授業補助等)
- 9月12日 「学校支援ボランティア研修会」を開催。
(大学生ボランティアによる活動体験発表)
- 10月31日 大学生登録者が303人に
- 2月22日 学校支援ボランティア「大学生シンポジウム」を開催。ボランティア活動経験のある大学生自らが事業企画から当日の運営まで参画し、次年度の活動の意欲を高めることに効果。ボランティア活動の場となった学校園からの感想・提案や大学の担当者からの制度推進への協力表明も。

事業の展開内容（特色）

大学生の「ボランティア活動」への意欲を喚起するため、年度当初にオリエンテーションを行い、本制度への参加募集を行った。登録希望者には研修会への参加を義務付け、活動経験のない学生に「学校園で活動する」という自覚を促したほか、学校園が求める活動内容を紹介し、ボランティア活動への参加意欲の高揚を図った。一方、ボランティアを活用する側の市内186の学校園全てを訪問し、制度のPRに努めたほか、広報テレビや広報紙による紹介やパネル展の開催など、様々な場面を通じて広報活動を行い、この制度の活用促進に向け努力した。

登録ボランティアは、岡山市生涯学習支援システム「マナビネット岡山」のホームページ上に掲載し、誰でも検索できるが、学生の場合は個人情報保護のため、情報を公開しないこととし、ボランティア活動のコーディネートは全て、生涯学習課で行った。

大学生へのボランティア要請については当初、希望する学校園から市生涯学習課へ連絡し

ていただき、その内容を各大学に伝え、掲示板等へ掲示していただいた上で、活動を希望する大学生は窓口担当の教官に申し出て、細かい点については学校と直接連絡を取り、活動を開始する、という流れを考えていた。

しかし、予想以上に多くの学校園から活動依頼があり、大学側からの回答を待っていたのでは、期待に応えられなくなり、実際には、生涯学習課担当者が直接、学生に連絡し、学校側の希望を伝えた上で、学校側と連絡方法を確認し、活動を開始するという流れが多くなった。

学校現場からは、子どもたちと年齢が近い大学生に支援して欲しいとの声が多く、一緒に遊んだり、活発に動き回ったりできる大学生に本当に感謝する旨の感想が多く寄せられた。

また、9月12日のボランティア研修会では、活動経験のある大学生に感想や反省を含めた発表をお願いし、参加した学生たちの「生の声」を聞き、今後の参考にしていただいた。

年度末に、一年間の活動を総括し、次年度の活動への意欲を高めるため、「大学生シンポジウム」の開催を企画し、学生たちに呼び掛けたところ、「体験発表をします。」「進行のお手伝いをしたい。」などと、協力の声が寄せられた。4大学の学生代表が集まり、シンポジウムの事業計画や準備を、生涯学習課担当者とともに行った。当日は体験発表はもちろん、司会・進行や会場設営も大学生自らが行う「大学生シンポジウム」の形となった。

これまで大学生にボランティア活動を要請していなかった学校園から、来年度は是非、支援して欲しいなどの声も寄せられた。

企画・活動する上でのポイント、留意点など

ボランティア活動の活用促進のためには、現状把握が不可欠だが、現在のところ活動状況の全てを把握することは難しく、年度末の学校園からの報告やボランティア学生へのアンケート調査の結果を待たなければならない。今後はボランティア活動の需給調整を担当するコーディネーターの養成にも力を入れ、より多くの学生が学校現場で活動できるよう努めていきたい。

注意すべきは、学校側が教員不足を補うために安易に大学生を利用し、無料で使えるスタッフとして捉えてはいけない点である。本来、ボランティア活動とは、活動する側と支援する側の双方にメリットがあるべきであり、学校現場は大学生に教育活動を支援してもらうとともに、一方で、外部からの教育力の導入により、刺激を受け活性化し、大学生はボランティア体験を通じて、子どもたちとの接し方や、実際の社会の厳しさなどを学んだり、教職を目指す大学生には、生の教育現場を体験できる貴重な場となりつつある。また、学校園も外部からの教育力の導入により、刺激を受け活性化することが期待される。

評価

本制度の所期の目的を十分に達したかどうか不明な点もあるが、支援を受けた学校園や活動した大学生の感想や、体験発表を聞く限りでは、①ボランティア活動への参加意欲がありながら、機会や場が与えられず活動できていなかった大学生が思う存分活動でき、また、②意欲的に取り組むボランティア学生を見て、子どもたちのボランティア活動への意欲が高まったようである。さらに、③「大学生シンポジウム」の開催を岡山市内の全大学へ通知する

ことで、今年度は本制度に参加していない大学から、次年度の参加を検討したいなどの申し出もあり、大学生のボランティア活動を定着させるのに、一定の成果を上げることができた
と考える。

今後は、登録ボランティアと学校園とのコーディネート機能を充実させ、より多くの学生
に登録してもらい、子どもたちのために頑張ってもらいたいと願っている。

活動風景



学校支援ボランティアオリエンテーション



川遊びの補助



大学生シンポジウム



遊具の片づけ



本の読み聞かせ